

## コンピュータ・コーポラ利用による現代英米語法研究 (7) : とくmany another＋単数名詞

田島, 松二  
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5337>

---

出版情報 : 言語文化論究. 5, pp.81-86, 1994-03-30. 九州大学言語文化部  
バージョン :  
権利関係 :

## コンピューター・コーポラ利用による現代英米語法研究(7)\*

——〈many a(n) + 単数名詞〉と〈many another + 単数名詞〉——

田 島 松 二

### I

アメリカ英語の言語資料 Brown コーパス (the Brown Corpus) とイギリス英語の言語資料 LOB コーパス (the Lancaster-Oslo/Bergen Corpus) を利用した一連の研究で、今回取り上げるのは「多くの (人, 物, 事)」を意味する〈many a(n) + 単数名詞〉と「他の多くの (人, 物, 事)」を意味する〈many another + 単数名詞〉という表現形式である。(この一連の研究のめざすところと両コーパスの概略については別稿で述べているので、そちらを参照されたい。<sup>1)</sup>)

### II

「多数の (人, 物, 事)」を個別的・配分的 (distributive) に表す形式に〈many a(n) + 単数名詞〉があることは我が国でもよく知られている。次例にみられるように、動詞や代名詞も単数形で呼応する。

*Many a good climber* (=many good climbers) *has met his death on this mountain.* [LDCE<sup>2</sup>] (イタリック体は筆者)

一般的にはやや文語的であるとか形式ばった表現と考えられ、通常の文体では上例の括弧内に示されているように〈many + 複数名詞〉が用いられる。その際、動詞や代名詞が複数形で呼応することは言うまでもない。

この 'many a(n)' のついた表現自体には語法上特に問題になることはない。ところが、たまたま金子稔氏の『現代英語・語法ノート』(1991) を読んでいて〈many another + 単数名詞〉という表現が存在することを知った。意味は〈many other + 複数名詞〉と同じである。〈many a(n) + 単数名詞〉という形式が現に存在し、かつ another が本来 an other であることを考えると、「他の多くの (人, 物, 事)」を意味する〈many another + 単数名詞〉という形式が存在しても何ら不思議はない。金子氏は折々収集した用例の一部とした上で、9 例もの実例を英米の新聞雑誌等から挙げ、しかも like のついた〈like many another + 単数名詞〉という形になっているものが多い、という興味深い指摘までしておられる。現実に使われる表現ではあろうが、many a(n) のついた形ほどに我々になじみのある語法とは思われないし、普段は意識されることの少ない語法ではなかろうか。そうだとすれば、この表現は実際にはどの程度使われるものなのか、そして金子氏の言われるように like のついた形が多いのか、といった点などを、もうひとつの表現〈many a(n) + 単数名詞〉と併せ、LOB, Brown 両コーパスを利用して確認してみたいと思う。その前に、これら二つの表現に関して英米の辞書・語法書等の記述するところを見てみよう。

## III

手許のイギリス系辞書はほとんど全てが ‘many a(n)’ を取り上げ、many と同義であることや単数名詞を従え、動詞は単数形で受けることを示している。それ以上の情報を提供してくれるのは僅か 2, 3 点である。即ち、CULD (1980) は、この形式を文語的にかつ強調のために用いられると述べ、OALD は第 3 版 (1974) まではやや文語的 (rather literary) としていたが、最新の第 4 版 (1989) ではこの説明を削除している。もうひとつの形式

〈many another + 単数名詞〉を取り上げているのは Collins<sup>1,2,3</sup> (1979, '86, '91) ぐらいで、そこでは a(n) の付く形と一緒に “foll. by *a, an, or another, and a sing. noun*” と説明されているが、例文も文体レベルの表示もない。また語法書・文法書では、幾つかが 〈many a(n) + 単数名詞〉形は常に単数動詞で呼応することを述べているぐらいであるが、<sup>2)</sup> Quirk et al. (1985, §5.23n) には 〈many a(n) + 単数名詞〉をやや形式ばった表現という注記がある。しかし、〈many another + 単数名詞〉を取り上げているものは皆無のようである。<sup>3)</sup>

一方、アメリカ系辞書では、RHD<sup>1,2</sup> (1966, 1987) を除くと、ほとんど全てが ‘many a(n) …’ はもちろん、‘many another …’ 形も挙げている。しかも、文語ないしは形式ばった表現という使用域の制限に関する注記も一切見られない。ところが、語法書では another の付く形を取り上げたものは皆無で、せいぜい 〈many a(n) + 単数名詞〉が単数動詞で受けることに触れているだけである。ただし、WDEU (1989, s.v. many a) だけは、この ‘many a(n)’ 形について、代名詞呼応の場合複数形で受けることがあると指摘している。

以上のことを総合すると、〈many a(n) + 単数名詞〉形は、イギリス英語で時として文語的表現と見なされることはあるが、英米共に

今日でも慣用法と見なされている。これに対して、〈many other + 複数名詞〉の意に相当する 〈many another + 単数名詞〉形に関する記述は、イギリス系の辞書・語法書等にはほとんど見られないが、逆にアメリカ系辞書は大半が取り上げている。しかも文語とか形式ばった表現といった文体レベルに関する注記も一切見られない。ということは、イギリス英語ではまず見かけられないが、アメリカ英語では 〈many a(n) + 単数名詞〉と同程度に見かけられる表現と理解すべきなのであろうか。

ところで、この 〈many a(n) + 単数名詞〉形及び 〈many another + 単数名詞〉形は一体いつ頃から見られるようになったのであろうか。OED, MED, Jespersen (*MEG*, Vol. II) 等の引用例を検討してみると、かつては無冠詞の 〈many + 単数名詞〉という形も存在していたことがわかる。この OE 以来見られた形式は 16 世紀には廃用となっている。<sup>4)</sup> 問題の不定冠詞 a(n) を伴った形式は 13 世紀初頭 (ただし MED によれば ? a1200) の Layamon's *Brut* に、another を伴った形式も既に 14 世紀末の Chaucer に起こる。

c1205 Lay. 5132 Al þa twa ferdan of *moni*  
*ane* eærde.[OED]

c1395 Chaucer *CT. WB.D.58* : Ech of hem  
hadde wyues mo than two, And *many*  
*another* holy man also.[MED]

ちなみに、中英語に関する最も豊富なデータを提供してくれる MED (s. v. mani 2a (b)(c)) には、〈many a(n) + 単数名詞〉形については 1300 年頃制作の *Horn* からの用例を始めとして計 24 例が、もうひとつの 〈many another + 単数名詞〉形については上記 Chaucer の用例から始まる 5 例が記録されている。もちろんこれらが中英語に起こる用例の全てではない

が,<sup>5)</sup> その数字からも当時の使用状況の一端は伺える。a(n)の付いた形は、以後一般的な表現として今日まで使い続けられていることは周知のとおりである。もうひとつのanotherの付いた形も、a(n)の付いた形ほど一般的ではなかったとしても同じく古くから見られる語法である、とは言えそうである。

以上のことを念頭に置いて、以下1961年の英米の言語資料であるLOB及びBrownコーパスで〈many a(n)+単数名詞〉と〈many another+単数名詞〉の実態を観察してみよう。

#### IV

「多くの(人,物,事)」と「他の多くの(人,物,事)」を意味する表現で、個々の人,物,事を強調する形式〈many a(n)+単数名詞〉及び〈many another+単数名詞〉のLOB, Brownコーパスにおける分布状況は次の通りである。

	many a(n)	many another	計
LOB	22	3	25
Brown	24	1	25
	46	4	50

量的にも質的にもほぼ均等の両コーパスにおいて、二つの表現の合計は偶然にも全く同じ25例ずつである。まず不定冠詞a(n)を伴う形式であるが、英米共に20余例起こる。中英語期以来見られ、今日では文語体と見られることもある表現にしては割合よく使われていると言えるのではなからうか。<sup>6)</sup> では、どの分野にも等しく見られるのであろうか。さすがに、政府刊行物・財団報告書・大学カタログ等からなるHの'Miscellaneous'やJの'Learned and scientific writing'など、漠然と数が多いことを述べる文脈を通常用いないジャンルには当然のことながら1例も見られ

ない。その他のジャンルでは用例は少数でもどのジャンルにも起こり、ジャンルによる片寄りは見られない。しかも、実例を検討してみると、以下に示すように、いずれも単に〈many+複数名詞〉が意味するところより、「多くのもの」の個々を強調するような文脈で用いられている。

- (1) through it she encouraged *many an unknown singer* from obscurity to concert status (LOB A09 204)
- (2) *many a girl* who is 'too tired to help mum' will later jump up with no apparent tiredness at all when her boy friend calls and go for a long walk (LOB D06 088)
- (3) Already *many an American* knows this count, and rejoices or worries depending on whether it is nearer 180 (safe) or 250 (dangerous) (Brown C17 056)
- (4) To put it bluntly, *many a local church* is giving its members only what they consciously want (Brown F37 148)

なお、OED (s.v. Many A.1.b) には、強調のためにmanyを重ねた'many and many a(n)'という形式も時々使われるという記述が見られるが、LOB, Brown共に該当例は全く見られない。

'many a(n)'が単数名詞を伴い、単数動詞で呼応することは上例(2), (3), (4)に見られる通りである。ところが代名詞呼応の場合、意味的呼応(notional concord)に支配され、複数形で受けることがある。このことを指摘しているのは英米の辞書・語法書等のうち、既に述べたようにアメリカ系のWDEU (1989, s.v. many a) だけであるが、用例が18世紀中

頃のもの1例だけであることを考えると、今日では極めて稀なのであろう。<sup>7)</sup> LOB, Brownの用例を見ても、これまた上例(2), (3), (4)に見られる通り、実質上全て単数代名詞で呼応している。唯一の例外は次のBrownコーパスの例である。

- (5) To *many a Frenchman*—they came 95 years ago, colonized and stayed until Laos became independent in 1953—the land had been even more delightfully tranquil than Tahiti (Brown F24 065)

これは厳密な意味では、上述の意味的呼応による複数代名詞呼応の例とは言えない。このtheyは文法的には先行する‘many a Frenchman’を受けるが、ダッシュがあることからわかるように、実際には付加的な挿入文中で使われている。そしてそれは95年前にラオスにやって来た「フランス人たち」を指しているのであり、その時やって来た個々のフランス人を強調している訳ではない。ここは文脈上heだったらむしろ不自然であり、どうしてもtheyで受けるべきところなのである。従って、一般的には動詞のみならず、代名詞も単数形で呼応すると考えてよさそうである。

次に、問題の〈many another+単数名詞〉形を見てみよう。上の表に示したように、イギリス英語のLOBに3例、アメリカ英語のBrownに1例、合計僅か4例しか見られない。先に触れた英米の辞書・語法書等の記述からすると、アメリカ英語に多いのではないかと推測されるところであるが、実際にはむしろイギリス英語に多い。とは言え、〈many a(n)+単数名詞〉形と比べても極めて稀な表現形式であることは間違いない。しかしながら、現実に使われる表現であることもまた事実である。<sup>8)</sup> 全用例を挙げる。

- (6) like *many another* property company it has attracted the backing of a leading insurance company—none other than the Prudential (LOB A25 052)
- (7) *many another* poem could I speak of which sang itself into my heart and memory (LOB G22 126)
- (8) but like *many another* gap that appears in philosophy (here readers will be reminded of the familiar gap with which moral philosophers are plagued between the ‘is’ and the ‘ought’, between matters of fact and matters of morality, between description and evaluation), this one is a product of our own confusion (LOB J54 085)
- (9) Though it was a great relief when the big brains on these shows turned out to be frauds and phonies, it did irreparable damage to the ego of the editor and *many another* intelligent, well-informed American (Brown B13 134)

なお、〈many another+単数名詞〉の名詞が省略されて、ただ‘many another’だけでも使うことができるらしいが、<sup>9)</sup> LOB, Brownコーパスにはそのような例は見られない。

このanotherのついた表現に関して、先述の金子(1991, p.86)には、likeという前置詞の付いた〈like many another+単数名詞〉という形になっているものが多い、という興味深い指摘がある。上に挙げた我々の例では、4例中2例、つまり(6)と(8)がその形になっているが、そもそも全体の用例数が少なすぎて明確な傾向を判断することはできない。

## V

以上、金子稔氏の論考に蒙を啓かれて、〈many another+単数名詞〉という表現形式の存在を意識するようになったことがきっかけで、「多くの(人,物,事)」と「他の多くの(人,物,事)」の個々を強調する形式〈many a(n)+単数名詞〉と〈many another+単数名詞〉を見てきた。

不定冠詞 a(n) のつく形については、英米を問わず、科学・学術論文等一部の分野を除き、どのジャンルでも比較的よく使われている。そしていずれも「多くの(人,物,事)」の個々を強調する文脈で使われている。ただし強調のために many を重ねた 'many and many a(n)' という形式は全く見られない。呼応に関しても全て単数動詞で受け、かつ代名

詞も一例を除き全て単数形で受ける。その例外的な一例も文脈上複数代名詞を必要とする挿入文で用いられたものである。

もうひとつの、another の付いた形〈many another+単数名詞〉という表現は、英米共に極めて稀な表現であるように思われる。とりわけ、アメリカ系辞書がこぞって記載している割りには、アメリカ英語の Brown コーパスには僅か1例しか見られず、イギリス英語の LOB コーパス(3例)より少ない。また、単数名詞が省略された 'many another' 形は全く起こらない。なお、問題の表現は、前に like という前置詞のついた〈like many another+単数名詞〉という形が普通であるという指摘もあるが、LOB, Brown 両コーパスの資料からだけでは用例自体が少なすぎて、そのような傾向を看取することはできなかった。

## 注

\*小論作成にあたっては、データ検索を共同研究者のひとり許斐慧二氏(九州工業大学情報工学部)にお願いした。記して謝意を表する。

- 1) 田島松二・許斐慧二「コンピュータ・コーポラ利用による現代英米語法研究(1)―'prevent me (from) going' と 'prevent my going'」『英語英文学論叢』(九大) 第43集(1993), pp. 145-60.
- 2) 例えば, Fowler<sup>1</sup>(1926) や Howard (1993) 参照。
- 3) ただし Greenbaum & Whitcut (1988) は〈many〉の項で用例のみ1例挙げている。
- 4) OED s.v. Many A.1.a 及び Jespersen, *MEG*, II, §2.73参照。
- 5) OED や Jespersen (*MEG*, II, §2.73) は MED の5例とは異なる例を挙げている。その Jespersen は many a と many another が同一文に起こる次のような例すら挙げている。

Chaucer *CT. Mel.* B 2266 For though that he ne foond no good womman, certes, *many another man* hath founden *many a womman* ful good and trewe.

- 6) 共同研究者のひとり許斐慧二氏が構築した、量的にはほぼ両コーパスに匹敵する1980年代以降のアメリカ英語コーパスには僅か5例を数えるのみである。が、これはコーパスの質の違いによる可能性が大きく、この語法が今日のアメリカ英語で稀になってきているとは即断できないであろう。
- 7) 参考までに、WDEU (1989) の挙げる18世紀中頃の例を下に示す。

... and misled many a good body that put *their* trust in me — Thomas Gray, letter, 6 Sept.

1758.

8) 注6) で言及した我々のコーパスには全く起こらない。

9) 参考までに、金子(1991, p. 87) に挙げられている2例のうち1例を引用する。

Like *many another*, I had thought, until I saw the story of Michelangelo as told in *The Titan*, that I knew what these things were.—John Mason Brown, *Still Seeing Things*.

### 参考文献

(以下に挙げる文献は小論で触れたものに限定している。)

- Collins<sup>1,2,3</sup>=*Collins English Dictionary*. 1st ed.(1979) ; 2nd ed.(1986) ; 3rd ed.(1991). Glasgow : HarperCollins.
- CUED=*Chambers Universal English Dictionary*. Edinburgh : W & R Chambers, 1980.
- Fowler, Henry W. 1926. *A Dictionary of Modern English Usage*. 1st ed. Oxford : Clarendon Press.
- Greenbaum, S. and Janet Whitcut. 1988. *Longman Guide to English Usage*. Harlow, Essex : Longman.
- Howard, Godfrey. 1993. *The Good English Guide : English Usage in the 1990s*. London : Pan Macmillan.
- Jespersen, Otto. 1949 (1913<sup>1</sup>). *A Modern English Grammar*, Vol. II. London : George Allen.
- LDCE<sup>1,2</sup>=*Longman Dictionary of Contemporary English*. 1st ed.(1978) ; 2nd ed.(1987). London : Longman.
- MED=*Middle English Dictionary*. Ann Arbor, Michigan : University of Michigan Press. 1952—.
- OALD<sup>2,3,4</sup>=*Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 2nd ed.(1963) ; 3rd ed.(1974) ; 4th ed.(1989). Oxford : Oxford University Press.
- OED=*The Oxford English Dictionary*. Oxford : Clarendon Press, 1933.
- Quirk, Randolph, et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman.
- RHD<sup>1,2</sup>=*The Random House Dictionary of the English Language*. 1st ed.(1966) ; 2nd ed.(1987). New York : Random House.
- WDEU=*Webster's Dictionary of English Usage*. Springfield, Mass. : Merriam-Webster, 1961.

金子稔『現代英語・語法ノート』東京(教育出版), 1991.